近代スポーツ成立過程研究の課題

唐木國彦

P・C・マッキントッシュの『一八〇〇年以降のイギリスにおける体育』(一九五二年)、『社会におけるスポーツ』(一九六三年)の二著作は、近代スポーツが一九世紀後半のイギリス社会で組織化され成立した過程についてひとつの定式を描きだしている。

マッキントッシュは、M・アーノルドの区分けにしたがって、イギリス社会の階層構成をa、「バーバリアン」(上流階級)、b、「フィリスタイン」(中産階級)、c、「ポピュラス」(労働者階級)の三層に分け、近代スポーツの創出をaからbへと封建的、貴族的文化が伝承・改良される過程のなかでとらえている。さらに創出された近代スポーツの支持層の増大をbからcへの文化の伝達過程としてとらえている。つまり、彼は、つぎに要約するような新興「中産階級」のスポーツ発明の努力とその発明品の宣伝流布の過程をもって近代スポーツの成立と理解しているのである。

(一)、「フィリスタイン」は、「バーバリアン」の占有物であった貴族文化としてのスポーツを改良して、フットボール、ホッケー、陸上競技、水泳、ローンテニス、ボート、自転車競技などを創出しそれらの競技組織を設立したばかりか、「多勢」のをいわせてクリケットに浸潤し、それをほとんど中産階級のゲームにしてしまった。

(二)、「フィリスタイン」は、はじめのうち「ポピュラス」を自分たちのスポーツに受け入れることについていささか気が進まなかった。しかし最終的には「競技中、自分たちのエチケットと振舞いに従うことを条件に」「ポピュラス」をむかえ入れた。

(三)、「そのうえさらに、多くの「フィリスタイン」たちは、「伝道師のような熱心さで」「ポピュラス」にゲームとスポーツを紹介した。

ここでは、近代スポーツの成立過程は、「上流階級」から「労働者階級」への文化の下降現象にともなうスポーツ人口の量的拡大とスポーツそれ自体の質的変革としておさえられ、その最大の貢献者を「中産階級」に定めていることは明白である。たしかに、一八六三年以降、イギリスではパブリック・スクールの卒業生を中核に一〇を越える全国統一スポーツ組織が設立され、フットボールの場合には、設立以来二〇世紀初頭までの三〇数年間にその加盟クラブ数を一〇〇〇倍にも増加させているという事実⁽³⁾は、「中産階級」がいかに精力的にスポーツを実践し、かつ賛同者を得ていったかをもがたっている。

しかし、その後、マッキントッシュがあげたパブリック・スクールでのスポーツの実態および全国統一スポーツ組織の競争ルール(「エティケットと振舞い」)を分析した諸研究⁽⁹⁾において、「中産階級」の近代スポーツ成立とそれの「労働者階級」への普及にはたした役割には二側面があることが明らかにされた。それは、「中産階級」を「近代ブルジョワジー」と規定し、「近代ブルジョワジー」がパブリック・スクールを自らの子弟の教育機関として制度的に改革を加えた時期がまさにパブリック・スクールでスポーツが市民権を得た時期(一八六〇年代)に一致するという事実を基底に置いた研究である。その要旨は、つぎのごとくである。

(一)パブリック・スクールでのスポーツは、帝国の支配者としての支配能力と自らの階級にたいする忠誠心を陶冶するための教育の手段として実施された。

(二)パブリック・スクールの生徒と卒業生の手による統一ルールと全国統一スポーツ組織は、より広範囲の地域間での対抗ゲームを可能にした点で「スポーツが一般化し、多くの人の共有物となる」ための前提条件をつくった(積極的側面)。

(三)反面、統一ルールは、内容的に労働者、大衆の生活条件に合致しえないものを要求しており、スポーツを「近代ブルジョワジー」の占有物にとどめておくという結果をもたらした(消極的側面)。

四、労働者、大衆の教育には、被支配者あるいは労働力としての資質を養成するため、スポーツに代って体操が配備されて

いた。

このようにして、「スポーツは、近代ブルジョワジーの思想を内包し、かつ代弁しており、国民大衆はその中において真の運動要求の実現を阻まれている」という近代スポーツについてのあたらしい認識が成立した。これは、マッキントッシュの単純なパターン、「中産階級」→「労働者階級」というスポーツの下降現象がたんに文化の一般的伝承過程として把握されていることを批判し、文化としてのスポーツが支配者階級と被支配者階級との相克のもとに置かれており、スポーツがすぐれて階級的な文化であることを指摘した点で近代スポーツ成立過程研究のひとつの重要な成果である。

二

近代スポーツがイギリス社会で成立した過程について、従来の研究は、一九世紀中葉のパブリック・スクールでのスポーツの質的改革と一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけての全国統一スポーツ組織の統一的結成にともなうスポーツ人口の増大を指標にしてきた。その際、近代スポーツの範疇は、一定のルール、組織をもつ競技スポーツに限定されており、プロ・スポーツやレクリエーション的な野外スポーツなどは、近代スポーツの研究対象から外されてきた傾向がある。

このような従来の研究は、スポーツがすぐれて階級的な文化であるという視点を明らかにするうえで、ふたつの重要な問題を残してきた。ひとつは、階級的相克のもとにスポーツが置か

れているとき、そのスポーツという文化のトータルな階級の支配構造を把握するには、競技スポーツの占有事実をあげるだけでは不十分である、という点である。従来の研究では、スポーツの支配構造を示すためにバブルック・スクールにおける競技スポーツと、一九世紀末の公立学校における労働者、大衆の教育手段として配備された体操との対比をとりあげてきた。競技スポーツと体操との間に、教育手段の階級的差別が認められるとすれば、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけてますます顕著になった野外スポーツとプロ・スポーツとの間の階級的分極化現象もまた労働者、大衆の余暇問題との関連で検討される必要がある。

つぎに残されている問題は、競技スポーツの階級的占有と全英国統一スポーツ組織拡大との関連である。近代スポーツが「近代ブルジョワジーの思想を内包し、かつ代弁して」いるとされるのは、イギリス社会において一九世紀初頭までの土地貴族に代って産業資本主義体制の支配権を握った新興ブルジョワジーが自らの享受対象として競技スポーツを発明したという事実にもとづいている。従来の研究では、競技スポーツの組織拡大をこの新興ブルジョワジーの権力制覇の過程によって裏づけている。しかし、組織拡大のもっとも頻度が高い一八七〇年代から一九〇〇年にかけて、新興ブルジョワジーは、もはや「新興」ではなく独占資本主義体制の中核にたっている。そのことは、当然他方にあたらしい種類の労働者との階級的相克を生みだし、一九世紀中葉の競技スポーツにおける階級的占有状態も何らか

の影響を受けざるをえなかったことを意味する。競技スポーツの組織拡大は、この独占資本主義段階のイギリス社会とどのようにつながっているのか、その点が従来の研究では残されたままになっている。

そこでつぎに、右のふたつの問題についても少しだけ検討をすすめてみよう。

* *

二〇世紀初頭のイギリスにおける野外スポーツとプロ・スポーツとの間の階級的分極化現象について、シュルツェリゲバーニッツはつぎのような指摘をしている。

「注意すべきことには、最も愛好されている国民スポーツの部門は、強度に金権主義的な様式を呈している。ポロと屋内テニス、狐狩と雷鳥狩、自動車やヨットの乗りまわし、世界旅行と海外での狩猟、そして質素なゴルフ遊びすら、多くの場合、器用な身体、たしかな視力、ふるえない手が必要とする上に、常に大きな財布を必要とする。それらのスポーツは、黒人、中国人、インド人の労働やあらゆる領地からの利子と地代に寄食し、母国の大地をたんに奢侈の対象ほどにしか評価していない貴族的人種を前提にしている」。これにたいして「国民の広い層へと下方に向って、スポーツは、文化的崩壊の作用を及ぼしている。……広大な手工業大衆にとっては、スポーツは、プロのものとなつていく。民衆、つまりまさに労働者大衆は、なにもしないか、あるいは熱狂的に参加する観衆となつていく。イ

ングランドの労働者にとつては、イングランド対オーストラリアのフットボール試合の結果以上に関心をひく問題は少ない⁽¹⁾。競技スポーツが教育の場面での階級的占有の問題として扱われうるとすれば、ここでの野外スポーツとプロスポーツは、余暇におけるスポーツの階級的分極化現象としてとらえることができる。剰余する時間と金銭とを背景に野外スポーツを享受する「貴族的人種」の経済的基盤が植民地労働力と投機、金利にあるという指摘は、スポーツを享受するというよりまさに奢侈を享受する金利生活者の余暇の実体を示している。これにたいし、労働者、大衆のプロ・スポーツへの関与は、あきらかにカタルシスとしてあるいは愚民政策としての意味をもっている。イギリスでは、これと同じ分極化現象がヴィクトリア朝初期にもみられた。マッキントッシュにすれば、一九世紀前半の土地貴族の田園生活は、その主要部分が野外スポーツでしめられていた。「狩猟、射撃、釣は、貴族の田園スポーツであった。馬を駆っての狩猟は、あらたに困い込みを行ない排水工事をほどこした田園地帯にはとくにふさわしいものであった⁽²⁾」。

他方、住民たちには、活動的なスポーツを行なうだけの共有地 (Village green) がなかった。サファク州のある牧師は、彼の教区の村びとたちについて証言している。「三〇年ほど以前には(一八一〇年代、引用者注)、彼らは、一年のうちしかるべき季節に特定の草野で遊び場を確保する権利をもち、そこで自分たちのフットボール大会を催した、ということを私はきいている。ところが、どうしたものかこの権利が失なわれてしま

い、草野はいまや鋤の下になつて……。最近になつて彼らはわずかばかりクリケットをすることを教えられ、二、三の農場主が親切心から彼らに草野で遊ぶことを許可している⁽³⁾」。

住民は、困い込み、「狩猟法」により野外スポーツから厳しく排除され、残されたものは、定期市の際の土着的、地方的なスポーツ行事あるいは貴族の後援する競馬や拳闘に賭けることだけであつた。支配者階級は野外スポーツに、被支配者階級はプロ・スポーツの傍観者にとつていうパターンは、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけてさらに確定的なものとなり、その半世紀間に前者における土地の所有権から金融資本の所有権へという変化を通じて分極化は一段と強固なものになつていくとみられる。

一九〇六年二月一日付の「アウト・ルック」誌は、プロ・フットボールについてつぎのように報じている。「フットボールの協会は、ほとんど国民的な機関のひとつとなつており、豊かに、大衆的に、そして力強く拡大しつづけている。協会の下にはいくつものことなつたリーグがあり、それぞれのリーグは、有限責任会社として個々に登録された二〇内外の組織(クラブ、引用者注)を包括している。これらのクラブのうち、最も豊かないくつか(選手たちに一週あたり四ポンドの最高給料を払つていると推定されるクラブ)の一週あたりの支出は、総額二〇〇ポンドを下らないにちがいない。そのうちのいくつかは、高い配当金を支払っている⁽⁴⁾」。これは、すでに企業の形態を整えている。スポーツという商品を野外スポーツから排除され渴望

状態にある労働者、大衆に売りつけているのである。「競馬と狐狩のためだけに、イングランドは、年に一四〇〇万ポンドを支出している」という金権主義的な野外スポーツから労働者、大衆が排除される程度に及びてプロ・スポーツが隆盛化するのである。

「アウト・ルック」誌が報告する週給四ポンドの選手たちは、同じ一九〇六年において週給四〇シリング以上を得ていた労働者が全労働者階級の二〇パーセントにいたらなかつたことを考え合わせると、フットボールだけを職業としても十分に生計がなりました。これらの選手たちは、「人口の大部分の精神的なレクリエーションを援助する」ことによる代価を得ているのである。それだけに、プロ・スポーツの各チームは、労働者、大衆の生活感情に確実に根を置いている必要があつた。

E・J・ホブズボームは、そのことを的確に言ひあてている。「フットボール・チームの効用は、(男性の)労働者階級の共同社会を組織することにあり、それらのチームは、通常ふたつの永久的なライバルであつて、ふたつの地方的な枢軸であつた。たいいていの工業都市は、ふたつの卓越した対抗するチームを育てた。スコットランドでは、このことが移民のアイランド人チーム(カソリック)と土着のスコットランド人チーム(プロテスタント)を明らかに連想させる特殊な形のチームを育てた。永久的なライバルの試合の行方に観衆もまたライバルに分かれて熱狂する、このことはそれ自体としては、ひとつの「精神的なレクリエーション」ではあるが、野外スポ

ーツの対極に位置づけるとき、すぐれて階級的な文化政策としての意味をもつてくるのである。

「イギリスでは、土地のますます大きな部分が、農業生産からひきあげられて、金持のスポーツや娯楽に供されている」という一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての野外スポーツの実態は、一方において人口の都市集中化が進むなかで労働者、大衆がスポーツの傍観者になっていく傾向を示していると同時に、他方において約一〇〇万人に達する金利生活者、「有閑階級」を生じさせたイギリス社会のあたらしい段階、独占資本主義階級のスポーツの実態を示しているのである。この独占資本主義段階とスポーツとの関係について、従来の研究では、その対象を競技スポーツに限定してきたため十分に解明できなかった。

* * *

マッキントッシュは、「中産階級のスポーツの労働者階級への拡大は、大部分が一八七〇年から一八九〇年の二〇年間に起つたのであり、労働時間の短縮を要求して、事務職者や職人が闘争を行ない成功をおさめたひとつの運動と時を同じくしている」としているが、この二〇年間に労働者階級がスポーツを行なうために、いかなる客観的条件が生じたのか、それを追つきりとおさえておく必要がある。

イギリス社会では、一八七三年の恐慌を起点として、一八八六年までつづいた「一八八二年経済恐慌」、さらに一八九六年までつづいた「一八九〇年経済恐慌」が起る。この「大不

況」期は、「自由競争の産業資本主義から独占資本主義への移行過程」を示すものといわれている。²³⁾

注目すべきことは、この「大不況」期に労働者の側では、標準八時間制の労働時間短縮要求をかかげた「新組合運動」が生まれたことである。「新組合運動」は、熟練労働者の労働条件確保だけを意図した封鎖的「職能別組合」に代る「不熟練労働者を中心として全階層の労働者に対する包括的開放組織」の運動であり、その最重点目標を八時間労働日の確立に置いていた。²⁴⁾

労働者階級がスポーツを行なうための客観的条件——金銭的・時間的余裕——は、この「新組合運動」と関連をもつ。すなわち、労働日短縮要求は、不健康で非衛生な、そして危険な労働環境への告発であると同時に、「娯楽、休憩ならびに余暇により多くの時間を欲」したことから要求であった。そして、この要求は、一八九〇年に入って最終的な実現をみる。マッキントッシュの指摘する二〇年間のスポーツの「下降現象」は、ひとつの重大なきっかけをこの「新組合運動」のなかにもっていることとみることができる。それは、「中産階級」の恩恵や「許可」ではなく、労働者、大衆のみずからの運動として要求してきたところに重要性をもつ。

しかし、「新組合運動」がこの時代の労働者、大衆へのスポーツの「下降現象」を決定的なものにしたとみることはできない。ホブズボームによれば、一八九〇年代においても労働者の四〇パーセントは「零落の極」に達しており、過給四〇シリング以上の比較的上層にある労働者（金属工業、木綿産業の熟練

労働者）および「最高賃金の書記、帳簿係」等のいわゆる「労働貴族」は、二〇パーセントに満たなかった。マッキントッシュが「スポーツクラブの大規模な増殖と地方組織とが起こった」原因としてあげる「事務職者や職人」の労働時間短縮運動の「成功」は、この経済的裏づけからみて、「零落の極」に達していた労働者層を指すのではなく、むしろ、「労働貴族」層を指すものと思われる。

レーニンが「資本主義の最高の段階としての帝国主義」で「資本主義の寄生性と腐朽」について触れる際、労働者階級に「上層」と「本来のプロレタリアの下層」との二層があり、「この上層部は、協同組合や労働組合、スポーツ、団体や宗教上多くの宗派などに多数の成員を出している」という事実をあげていることは、きわめて示唆的であるといわねばならない。もし、この「上層」が「労働貴族」層としてスポーツの「下降現象」、競技スポーツ人口の増大を支えていたとすれば、近代スポーツは、「近代ブルジョワジーの思想を内包し、かつ代弁している」ということのほかに、資本主義に寄生し寄食する「労働貴族」層の思想がどれだけ添加されているのかを検討しておく必要がある。

* * *

近代スポーツ成立過程研究は、一九世紀中葉において、競技スポーツが倉出されたという意味でひとつの区切がつけられるとしてもスポーツという文化のトータルな階級的支配構造を明

らかにしつつ近代スポーツの成立過程を検討するには、一八七〇年代から二〇世紀初頭にかけての時期はきつとどの区切を置くべきであらう。その場合、産業資本主義から独占資本主義へイギリス社会が移行する際に、近代スポーツがどのような性格づけをされたのか、労働組合運動との関連で明らかにする必要がある。

(103) 研究ノート

(1) McIntosh, Peter C.: *Physical Education in England since 1800*, London, 1952.
 (2) McIntosh, Peter C.: *Sport in Society*, London, 1963.
 (3) cf. Arnold, Matthew: *Culture and Anarchy*, 1869, chap. III.
 (4) McIntosh, P. C.: *op. cit.*, p. 64.
 (5) *Ibid.*, p. 73.
 (6) 丹下保夫『体育技術と運動文化』明治図書、一九六三。
 川口智久「スポーツの近代化と階級的性格」、『一橋論叢』第五十巻第六号、中村敏雄「運動文化論(14)——国民運動文化の創造——」体育科教育、一九六七年四月号、同『近代スポーツ批判』三省堂、一九六八、などを指す。
 (7) 前掲、川口論文。
 (8) 前掲、中村論文「運動文化論(14)」。
 (9) (6) にあげた諸論文を指す。
 (10) (11) Schulze-Gaevernitz, G. v.: *Britischer Imperialismus und englischer Freihandel, zu Beginn des zwanzigsten Jahrhunderts*, Leipzig, 1906, pp. 362—3.

(12) McIntosh, P. C.: *op. cit.*, pp. 58—9.
 (13) Hobsbawm, E. J.: *Industry and Empire, An Economic History of Britain since 1750*, London, 1968, p. 81. 傍点は原文イタリック。
 (14) cf. Schulze-Gaevernitz: *op. cit.*, p. 471 n.
 (15) *Ibid.*, p. 361.
 (16) Hobsbawm, E. J.: *Labouring Men, Studies in the History of Labour*, London, 1964, p. 285.
 (17) Schulze-Gaevernitz: *op. cit.*, p. 471 n.
 (18) Hobsbawm, E. J.: *op. cit.*, *Industry and Empire*, p. 264 n.
 (19) ウォー・イ・レーニン「資本主義の最高の段階としての帝国主義」『レーニン全集』大月書店、第二二巻、三二六—三二七。
 (20) 同上書、三二五—三二七。
 (21) McIntosh: *op. cit.*, *Sport in Society*, p. 72.
 (22) 入江節次郎『独占資本イギリスへの道』ミネルヴァ書房、一九六八、七七—七九。
 (23) 前川嘉一『イギリス労働組合主義の発展』ミネルヴァ書房、一九六七、二七—三三および一一一—一二ページ。
 (24) 同上書、一一九—一二ページ。
 (25) Hobsbawm: *op. cit.*, *Labouring Men*, p. 285.
 (26) 前掲『レーニン全集』三二六—三二七。傍点は引用者。その他「インブリック・スクールについては」R・H・+

ローニー『急進主義の伝説』浜林・鈴木訳、新評論、一九六
七年 Warner, Rex: *English Public Schools*, London, 1946.
Simon, Brian: *Studies in the History of Education*
1780—1890, London, 1969.
新興ブルジョワジーの権力制覇について、Guttsman,

W. L.: *The British Political Elite*, London, 1965, Marsh,
D. C.: *The Changing Social Structure of England and*
Wales 1871—1961, London, 1965. を参照した。
(一橋大学専任講師)